異世界に転生した俺は絶対順守の力で
魔王・女王・奴隷ハーレム世界統一!
小説 ウナル
挿絵 ロッコ
立ち読み版

第一章　異世界メルファン　007
第二章　魔王城　050
第三章　法王洗礼　093
第四章　和平　141
第五章　反乱軍　177
第六章　救世主　213

第一章　異世界メルファン

「危ない！」

信号待ちをしていた横断歩道。チープな『とうりゃんせ』の音を聞いていたら、突然隣の少女が道路に倒れ込んだ。

こういった場合において篠岡圭吾（しのおかけいご）は迷わない。

反射的に道路に飛び出し、倒れる少女の手を握った。そのまま彼女を歩道に引き寄せたまでは良かったものの、代わりに圭吾の身体は道路に放り出されてしまった。

（うわあ。よりにもよってトラックか）

迫り来る巨体に圭吾は万が一の幸運を諦めた。これが軽自動車だったならばまだ望みはあっただろうが、二十五トンの車体相手では生存は望み薄だろう。

（――いや、これで良かったんだ。女を見捨てることなんかできないよな）

視界の端で歩道に倒れた少女がいることを認め、圭吾はほっと息をつく。

男は女を守るもの。圭吾が心に刻む信条だ。

あの少女が自殺志願者だったにせよ、ただの立ちくらみを起こしたにせよその命を守れたことを圭吾は誇りに思う。銀色のバンパーに映る自分の顔が満足気に笑っていることに

気づき、圭吾は胸を張って目を閉じた。
「……あれ？」
衝撃はいつまでも来なかった。代わりに不思議な浮遊感が身体を覆っている。
はね飛ばされて宙を飛んでいるにしては妙に心地好い。うんと高い所から落下しているような超常的な快感だ。
顔に当たる風。髪の毛がドライヤーを使っているみたいになびいている。
そろりと目を開く。視界には一面に緑の草原が広がっていた。
「え、えええええええええええええっ!?」
流石（さすが）に声が出た。
次に目が覚めたらベッドの上か棺桶の中かと思っていたのに、まさか見知らぬ草原に落ちている最中だとは夢にも思わなかった。
（お、落ち着け。できる男は取り乱さない！）
幸い地上まではまだまだ距離がある。圭吾は視線を揺らして現状把握に努める。
服はさっきまでとまったく同じ。持っていたカバンはどこかに行ってしまっていた。真下の地上では豆粒みたいな人影が忙（せわ）しなく動いている。近くにある六角形はテントだろうか。右側に視線をずらすと大きな湖がある。湖にはいくつかの川が伸びており、その川に沿うように民家が並んでいる。そしてそのずっと向こう側、地平線の向こうには映画で見

たようなお城が城壁に囲まれて建っていた。
「うん。分からん」
少なくとも日本ではないだろう。風景からするに西欧のイメージが近いが、それが分かったところで何の慰めにもならない。
その時、目の前を巨大な影が横切った。
風の感覚が下から横に切り替わり、ごわごわとした感触が肌を覆う。
「こ、これは……鳥!?」
圭吾が落ちたのはセスナ機ほどもある巨大な鳥の背中であった。茶色と黒を基調とした羽毛は鷹を彷彿とさせ、彼の頭部には鋭い黄色の嘴（くちばし）が伸びていた。
「助かったけど……地球にこんな鳥いるわけないよな。はは……」
ともあれ、助かったのは事実。圭吾は振り落とされないよう大鳥の羽をしっかりと掴む。
ギロッ。
その刺激で圭吾の存在に気づいたのか、大鳥が鋭い目を向けてきた。
「うわわっ！」
巨大な翼が空を打ち、ぐるりと横回転を始めた。さらにねじりを入れた急降下。遠心力にものをいわせて振り落とすつもりだ。
「くそっ！　ま、負けるか！　せっかく生き延びたのに死んでたまるか！」

圭吾も歯を食いしばり、暴力的なアクロバットを耐える。
大鳥は苛立ったようにさらに過激な飛行を始める。空中を一回転、急降下と急停止、遂には焦れたように嘴を背中に回して圭吾を突き殺そうとし始める。
「――ついい加減に！　止まれって！」
大鳥の身体が淡く輝く。圭吾は右手を振り上げ、その頭に落とした。びくんっ、と大鳥の身体が痙攣したかと思うとその動きが揺り籠のように大人しくなる。
「あ、あれ？」
ふと見ると、大鳥の首の辺りに奇妙な紋章が浮かんでいた。
「……ちょっと右に飛んで」
大鳥は旋回し、右方向へと身体を向けた。そのまま滑空し遊覧船のように空を舞う。
「俺の思う通りに飛んでいるのか？　この紋章のおかげか？　それじゃあ、これは俺の力なのか？」
背筋がぞわぞわと波打つ。こんな鳥を自由にできる力。まるで幻想小説の世界にでも入り込んでしまったかのようだ。
「よーし！　急降下だっ！」
圭吾の声に大鳥は翼をはためかせ、地上に向けて落ちるように飛び始めた。空気が壁に感じるほどの圧力が身体にかかり、重力加速を無視した速度が世界を引き延ばす。

豆粒ほどに見えていた人影がぐんぐん近づいてくる。彼らに挨拶するように低空で再び舞い上がり、巡回するように飛んでみた。視認できるほど近づき彼らの姿がようやく見て取れた。金属の胸当てに腰には剣、中には立派な馬に乗っている者も居る。

「まるで中世の兵士だなあ。物々しく弓を構えて……弓？」

ビュンッ！

風切り音が聞こえたかと思うと大鳥が大きくバランスを崩す。さらに音が続き、大鳥は痛みに身をよじる。

「うわあっ！」

ぐらりと大鳥の身体が揺れた。圭吾は為すすべなく滑り落ち、六角形のテントの一つへと落ちていく。

ボスッ！

テントの天井を突き破り、その中へと墜落した。幸い布がクッションとなってくれたのか、背中は痛むものの動いても問題なさそうだ。

「いてて。ここは……え？」

顔を上げた圭吾が見たものは、一糸纏わぬ身体を晒す美女であった。

ちょうど汗を拭いていたのか、傍に置いた台に片足を乗せた姿勢で彼女はこちらを見ている。

まず目を引いたのは燃えるような真紅の髪だ。
そして、形の良い大きめのバストと図らずも見せつけるようになってしまった股間が目に入る。圭吾は床に倒れ込んでいるせいもあり、ありありとその部位を見てしまった。
（あ、あそこの毛もやっぱり赤いんだ）
見ればその手足は瑞々しくも相当に鍛えられているようで、腹には筋肉の筋が浮かび、むっちりとした太ももは確かな弾力を返してくれると容易に想像できる。
贔屓目に見ても、圭吾が今まで見てきたどんな女性よりも美しいと思えた。
「か、可愛い」
「な、なあっ!?」
思わず口から出た言葉に美女は顔を真っ赤にして後方に飛び退いた。
「き、貴様は何者だ!?」
耳まで赤くしつつ女性は傍にかけてあった布で前を隠す。いつの間に取り出したのか、手には一振りの剣が握られて、その切っ先を圭吾に向けてくる。
「うおっ！　どこから出したんだ!?」
「こ、この私に向かって可愛いなど何たる侮辱だ！　メルファン王国の勇者ネルと知っての狼藉か!?」
「め、めるふぁん？　ゆうしゃ？」

聞き慣れない単語に圭吾は目を瞬(まばた)かせる。
一方の女性の方は切っ先を圭吾の首に向け、じりじりと距離を取る。
「さては貴様、魔王の手のものだな。ならば、この場で取り押さえてくれる！」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　俺はただ気がついたら空から落ちていて！」
「そんな戯言(ざれごと)を――」
瞬間、爆発音と衝撃がテントを揺らした。
「敵襲か！」
衝撃の中でも動揺(どうよう)一つ見せなかった女性は、凄まじい速度で下着と服を身に着けテントから飛び出していった。
地を揺らす振動が断続的に続き、圭吾はたまらずテントの出口に向かう。
テントの外では槍や弓を手にした兵士たちが慌ただしく走り回っていた。その顔は緊張感で溢れ、まるで戦争でも始まるかのような騒ぎだ。
そして彼らが一様(いちよう)に向かう先を見た瞬間、圭吾は呆然と全身の力が抜けた。
「なんだよ……あれ？」
地平の果てより迫り来る砂煙(すなけむり)。それを生み出しているのは異形の怪物たちだ。
巨人、翼人、大蛇に獅子。百鬼夜行もかくやという怪物たちの行進は夢と言うにもあまりに現実離れした光景だった。

「状況は!?」
凛とした声に意識が戻る。見ればすぐ傍で、従者と思われる兵士たちがネルに鎧を着せていた。
「南西より魔物の軍勢！　以前より陣取っていた一団が動き出したようです！」
「痺れを切らして出てきたか。メルファンの軍勢も舐められたものだな！」
鏡のように磨かれた白銀の鎧、それがネルの装備らしい。顔さえ映りそうなほど磨かれたプレートアーマーは、彼女の心を映し出しているようだった。
「そこの！」
鎧を身に着け終わったのか、ネルはガシャガシャ音を立てながら圭吾のもとへと歩み寄ってくる。
「このテントの中に居ろ！　もし勝手に出たら命はないと思え！」
ネルの言葉にただただ頷く。
それを確認し、ネルは用意された馬へと飛び乗った。そして腕を振るうとその手に先ほどと同じ荘厳な剣が生み出され、金色の輝きが辺りを照らす。
「この剣は聖なる刃！　この身は運命の運び手！　神の加護あれば恐れることなどありはしない！　勇者ネル、打って出る！　総員続けっ！」
騎馬の嘶きと共に兵士たちの行進が始まる。

ネルは戦場でも兜を被らないのか、その真紅は砂埃に交じってもはっきりと見て取れた。
「す、すごい」
先陣を切ったネルの戦いぶりはもはや人のそれではなかった。身の丈五メートルはありそうな巨人の鉄槌を受け流し一閃の元に切り伏せる。小鬼たちをまとめて十匹は吹き飛ばし、空を舞う魔物さえ金色の輝きからは逃れられない。
その勢いに追随する兵士たちも士気を高め、魔物たちを押し返していく。
勇者。
なるほどネルが名乗った異名は、まさしく彼女に相応しいものであった。
「あっ!?」
そんな彼女の活躍の最中、一際巨大な火柱が草原に上がった。紅蓮の炎に巻き上げられた兵士たちがバタバタと地面に倒れていく。
「ド、ドラゴン!?」
離れたテントからでもその異形は見て取れた。灰色の岩が動き出したかという巨体が炎を撒き散らして兵士を焼いていく。
どういうわけかその頭部には黒衣の女性が優雅に立ち、ネルに向かい手招きしていた。
ネルが跳ぶ。黒衣の女性が応じる。金色の刃の煌めきは、しかし黒い瘴気の一撃に弾かれ落ちる。白銀の鎧は草原に落ち、そこにドラゴンの爪が迫る。

「危ない！」
圭吾は思わずテントから飛び出していた。
「おい貴様！」
見張りの兵士たちの制止も耳に入らない。自身の足の遅さに歯噛みしていると、巨大な影が覆い被さった。飛び去ったかと思った大鳥が、圭吾に応じるようにやって来ていた。
鳥の足を掴み全力で飛ぶよう心で念じる。大鳥は翼を広げて弾丸の如く飛び立った。

「ここまでじゃのう王国の勇者。その足ではもう逃げ回ることもできまい？」
「舐めるなよ魔王ベルンハルディーネ！　たとえ肉が削げ落ち骨が砕けようとも、その首を斬り落とすまでは私は止まらぬ！」
傷つきなお戦意を失わないネル。それに魔王と呼ばれた褐色肌の美女は悠然と笑んだ。
「そなたとの戯れ、妾は嫌いではなかった。だがここまでじゃな」
巨竜の大顎が開かれる。マグマのような赤が喉奥から迫り、じりじりとした熱さが肌を焼く。
「刈らせてもらうぞ、その命」
「くっ！」
「うおおおおおおおおおおおおっ！」

「動かないでくださいね」
背後からかけられる吐息混じりの囁き。その声さえも官能に変わり、圭吾は身を内側に縮ませた。
さらにアレリアの手は鎖骨を越え、圭吾の胸板へと伸びていく。
「ちょ、ちょっとそこは！」
ぞわりとした予感に圭吾は思わず身をよじる。それを押し返すように薄い胸板が一層強く押し付けられた。
「拒絶してはいけません。ただあるがまま、神に身を委ねるのです。ネル」
「はっ」
「お、おい！」
アレリアの声にネルまで動き出す。圭吾の正面に立ち、腕を掴んで身体を密着させてくる。流石に勇者だけはあり男の圭吾でも抜け出せないほどの力だ。
だがそれ以上に、夢のようなこの状況が圭吾のあらゆる抵抗を封じてしまっていた。
美女二人に前後からサンドイッチにされる。
こんな状況から抜け出せる男など居るはずがない。
「ま、待て待てっ！」
「大人しくしろ！　全ては神のご意志だ！」

まるでマシュマロのような柔らかさ。それに若々しい肉質が合わさり、肌が蕩けていくような心地だった。

「さあ、圭吾様。心を開いて……全てを受け入れるのです」

ウィスパーボイスで言いながらアレリアが身体を擦りつけてくる。ボリュームこそネルには及ばないが、きめ細やかな肌と高い体温が肉質以上の快感を与えてくる。

ぬちゅっ……ぬぷっ……にちゅ……っ。

二人の身体がゆっくりと前後し、熱い蜜を広げていく。

身を寄せているためにつんつんと当たる胸の突起。

見てはいけないと思いつつも視線の端にそれを捉えてしまう。

ぷるんと張った胸元に咲く桜色の乳首。蜜によってぬらぬらと煌めくそれは、男なら誰しもが求めてしまう至極の宝石だ。

（さ、触ったらどんな感じなんだ……結構硬いよな？）

肌に全神経を集中し、二人の感触を余すことなく感じ取ろうとしてしまう。今なら二人の息遣いすら肌に感じることができそうだった。

「腕にも蜜を広げるぞ」

「神の御心（みこころ）を、貴方に」

「うあ、あっ！」

快感に圭吾の抵抗が弱まったのを良いことに、二人の少女は圭吾の腕を取りそこに肌を押し付けてきた。

むにゅっ！　ぬちっ！　ぐちゅっ！　ぬちゃあっ！

今まで以上の粘着質な音が響き、耳さえも蠱惑に犯される。

ネルの動きは機敏だった。鍛えられた肉体を駆使し、胸に溜まった蜜をスクワットめいた力強さで腕に擦りつけてくる。

一方のアレリアはひたすらに丁寧だ。圭吾の肌の細胞一つ一つに神の蜜を与えるようにゆったりとした動きで万遍なく蜜を広げる。

まったく異なる二つの刺激。

それを左右に流し込まれて、悦ばない男など居ないだろう。

（女の子の身体ってこんなに気持ち良かったのか！）

ぐぐぐっ。

手拭いを押し上げ、圭吾の雄が昂っていく。

（い、いやダメだ！　こんな気持ちは！）

彼女らはあくまで儀式としてこの行為を行っている。そこに劣情を覚えるのは二人への裏切りのように感じてしまう。そう思うものの、心の底の男としての欲求もまた逆らうのは難しかった。

愛液に満たされた蜜壺が、肉棒の出入りに合わせてぬちぬちと卑猥な音を奏でる。
そこにベルンの喘ぎが合わさって、圭吾の耳まで感じさせてくる。
ぷるっ！　ぷるんっ！　ぶるっ！
さらに圭吾の視界にはぶるんぶるんと円を描く乳房がある。乳首はラズベリーのように張り詰め、腰を突くたびに震えている。
声、音、膣、胸。
まるでベルンの身体をチンポでコントロールしているようだった。
（チンポを動かすたびベルンの身体中が反応しているっ！　俺のチンポがベルンの全部を感じさせているんだ！）
確かな実感を掴み、圭吾はさらに創意工夫を凝らし始める。
乳房の時のように刺激を与える位置を微妙に変えて、ベルンの反応を窺う。
右。
「ひっ！」
左。
「んっ！」
下。
「はぁんっ！」

上。
「あはあああああああああんっ！」
「ベルンはここが感じるんだな！　よしよしっ！　良いオマ○コだぞ！」
女は口では嘘をつけても、膣では嘘をつけない。
びっくりするくらい素直に反応してくれる膣内を、圭吾は惜しみなく褒めてやる。
「ああんっ！　あっ！　そ、そこっ！　気持ち良いのじゃあ！　主殿のデカマラで魔王マ○コを突きまくっておくれえええええっ！」
見つけ出したベルンの弱点を圭吾は徹底的に責めていく。裸にされた性感に、ベルンはよだれを垂らして悦んだ。
すっかり雌穴は解れ、腰もかなり自由に動かせるようになってきた。圭吾は口端を一舐めすると、肉棒を一旦入口付近まで引き抜き痙攣するベルンの膝を掴み直す。
溜めは一瞬、全力をもってベルンの膣へ腰を突き入れる。
「はあああんっ！」
ずちゅうううううっ！
カリ首が膣道を走り、一気に最奥まで到達する。
コリッとした固い部分を肉先に感じた。
そここそが子宮口。雄の精子を飲み込む最終目的地だ。

「ここがベルンの！」
「そ、そうじゃ！　わ、妾の一番大切な場所……主殿の子を産む部屋じゃっ！」
亀頭の先に感じる温かさ。確かな性交の終着点。その実感を覚え、圭吾の興奮はさらに高まる。
ずぶっ！　ずちゅっ！　ずぶぅぅぅっ！
ベルンの身体にさらに覆い被さりながら、圭吾は腰を打ち付ける。
弱点である上側を意識して擦りながら、子宮のお口に亀頭キスを降り注がせる。
「おチンポがノックしておるのじゃあっ！　お腹の奥の奥まで愛してもらっているのじゃ！」
ザーメンを絞り出さんとするベルンの膣圧に、腰がまるごと抜けそうだ。
子宮口はちゅうちゅうと鈴口に吸い付き、精子と卵子のお見合いをさせんと強引なまでに愛してくる。
「くっ締まるっ！」
今夜最高の締め付けに、溜めに溜めた快感が悲鳴を上げる。
ギリギリとチンポが反り上がり、さらに一回り質量を増した。
「ああっ！　おチンポ様がさらに膨らんで！　出るんじゃな!?　主殿の元気なプリプリザーメン、ベルンの奥にドピュドピュしてえっ！」

「おほおおっ！　主殿のデカチンポ様来たのじゃあ！」
ずにゅうううううっ！
蕩けたベルンの蜜壺に、奥まで一気に肉棒を突っ込んだ。
ベルンの膣内はとろとろふわふわだ。まるで焼き立ての卵焼きのように熟した大人マ○コには何度挿れても飽きることはない。
深さもアリーセよりもずいぶんあり、奥の奥まで肉棒を突き込むことができる。
「大きいのう♪　太いのう♪　妾の一番奥まで簡単に届いてしまう主殿の逞しいペニスじゃ♪」
「そう言って貰えると嬉しい、よ！」
ずじゅっ！　ちゅぶっ！　ずんずんっ！　ずぶううっ！
ベルンの腰を持ち、思い切り身体を打ち付ける。
女の背中を見ながら思うさま腰を動かす。男の征服欲が満たされる瞬間だ。
パンパンと肉同士のぶつかり合う音が響き、ベルンの巨乳がぶるんと震える。
「んぁ……ご主人様ぁ……」
ようやく余韻から立ち直ったのかアリーセがベッドから身体を起こす。
「アリーセ。起きたのか。それじゃあ、ちょっとお願いがあるんだが」
「はい。なんでしょうか？」

「あんっ！　ああんっ！　主殿ぉ……はうぅぅっっ!?」
快感に酔いしれていたベルンの背中がビクンと震えた。
狙い通りの反応に圭吾は心の中で拳を握る。
「んふぅっ。何だかとてもドキドキしますね……んちゅっ」
膝立ちとなった圭吾の股の下。そこにアリーセが仰向けになって入り込んでいた。
目の前で繰り広げられる挿入風景を眺めながら、舌を伸ばして接合部を舐めるアリーセ。
「あふぅぅぅぅっ！　ア、アリーセ!?　そ、そこは……っ！」
「ベルンさんに弄られた分、しっかりお豆を舐めますね♪　れろっ♪」
先ほどクリトリスを弄られた意趣返しとばかりに、アリーセは褐色の足を掴むと股間に顔をくっ付けた。そして発情した陰核に赤い舌を這わせ始めた。
「ひぅっ！　ふ、二人がかりとは卑怯なぁ！」
「さっきベルンがしたことだろう。ほら、お尻の穴も責めちゃうぞ」
「そ、そこぉっ！　やっ！　妾、そこはぁ！」
右手親指でベルンのアナルをほじってやる。
マ○コに比べればまだまだこなれていないが、伝った愛液によって十分に広がっている。
そしてベルンは同時責めに弱い。一つ一つなら結構耐えられるのだが、複数の刺激を同時に与えられると快感を処理しきれなくなるようだ。

「あっ！　あんっ！　ク、クリも！　アナルも一緒に弄られるぅっ！　だ、ダメじゃ！　妾の中で気持ち良いのが弾けてええっ！」
「ベルンも乗って来たな。もっと激しくするから気を確かに持つんだぞ！」
「んひっ！　主殿のチンポで子宮をノックされて！　じゃ、じゃがこのくらいでえ！」
シーツを掴み、枕を噛み締めながらベルンは快感に耐える。
だがこんな姿も見慣れたもの、軽く子宮口をつついてやればたまらず獣みたいな喜悦の声を上げる。
「んふっ。ご主人様。睾丸の方も舐めてよろしいですか？」
「ああ。アリーセの舌で玉からチンポまで全部しゃぶってくれ」
「ありがとうございます♪　ああっ、ザーメンがたっぷり詰まったご主人様の肉袋♪　舌先で味わえるなんて嬉しいです♪」
小柄な身体を生かし、アリーセは圭吾とベルンの下を行き来する。
巨大な圭吾の睾丸に赤子のように吸い付き、皮越しのザーメンを味わう。鼻息はさらに荒くなりまるで顔中で味わっている様だ。
そして再びチンポを舐め上げ、ベルンのもとへ。
繰り返される反復奉仕に圭吾の肉棒も硬度を増す。
「んくぅっ！　主殿のチンポっ！　もっと、もっと突いて欲しいのじゃっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!